

# 条件と絶対的なものの構造

## — ヘーゲル論理学に於ける根拠の一問題 —

徳増 多加志（児童学科・教授）

### Bedingung und die Struktur des Absoluten —Ein Problem des Grundes in Hegels Wissenschaft der Logik—

TOKUMASU Takashi

#### Zusammenfassung

Der Zweck dieser Abhandlung besteht darin, einen philosophischen Sinn von “Bedingung” in Hegels Wissenschaft der Logik zu erläutern. Es ist wie folgt :

1. Wir stellen die Aporie fest, die Hegel im Begriff von Bedingung entdeckt, aufgrund des Gedanken Jakobis, dass das Erkennen des Unbedingten unmöglich sei, und erläutern vorläufig den Sinn der Stellen der Bedingung in Wissenschaft der Logik.
2. Wir sehen die Unvollkommenheit des “vollständigen Grundes” ein und betrachten die Notwendigkeit des Auftreten der Bedingung. Und weiter forschen wir nach den logischen Grundlagen, die die relative Gegensätzlichkeit von “Bedingung” und “Grund” überwindet, und fassen die logische Struktur des “Absolut Unbedingten”
3. Wir gehen nach, wie Hegel die Aporie auflöst, die “Bedingung” in sich enthält, und betrachten die philosophischen Implikationen, die seine Auflösung hat.

Schlüsselwörter : Hegel, Logik, Bedingung, Grund, das Unbedingte

キーワード : ヘーゲル、論理学、条件、根拠、無条件的なもの

#### はじめに

本稿が直接に扱う主題は、ヘーゲル『論理学』に於ける「条件 *Bedingung*」というカテゴリーである。このカテゴリーには哲学一般の問題として多岐に亘る問題が含まれているが、本稿では、ヘーゲルが哲学的問題として捉えた限りに於いて、これを以下の段取りで扱う。—— 1. 「条件」が問題にされるコンテキストとして、哲学史的にヤコービとの関連を追及し、また論理学体系の中の位置づけに関連する問題点を確認する。2. 所

謂『大論理学』の「根拠」に於いて登場する「条件」が出てくる必然性とそれを見る観点を明確化する。3. 明らかにされた論点を振り返り、「条件」の論理が哲学的に意味するものを考察する。

#### 1. 問題としての「条件」というカテゴリー

##### 1-1 ヤコービの問題をヘーゲルはどう受けとめたか？

ヘーゲルにとって「条件」というカテゴリーは、ヤコービの哲学と本質的に係わりをもつ。それは

『エンツュクロペディー』の「予備概念」の「客観性に対する三つの態度」の内の第三の態度<sup>2</sup>の記述にも明らかである。しかし、ここでは『哲学史講義』を材料に考察を進めたい。

ヘーゲルは、『哲学史講義』に於いて「第3編 最近のドイツ哲学」の中の一節として「A. ヤコービ」（その後、B. カント、C. フィヒテ、D. シュリング、E. 結論、と続く）を配し、その冒頭を「カントとの結びつきに於いて我々はここでヤコービにも言及するだろう」<sup>3</sup>という一文で始めている。ヤコービは、カント哲学の帰結の現れの一つとして扱われているのである。ヘーゲルは、カント哲学の如何なる側面を捉え、ヤコービとの繋がりを見出したのか。

ヘーゲルが主に言及するテキストは、メンデルスゾーンと交わした書簡（所謂『スピノザ書簡』）である。ヘーゲルによると、ここで展開された論争を通じて、「ヤコービはスピノザ主義に対する深い識見を示し」、「その哲学的見解、特に認識のはたらき **das Erkennen** についての哲学的見解をより詳細に展開し叙述する」<sup>4</sup>機会を得たのである。ヘーゲルが注目する論点は、スピノザ主義の問題と認識の問題である。二つの問題はヘーゲルに於いて分かちがたく結びついていた。

ヘーゲルがヤコービの主要思想と見なすのは、「証明の道はいずれも宿命論 **Fatalismus** への道に帰着する」（318）という考えである。この場合の「宿命論」とは無神論としてのスピノザ主義のことである。ヤコービによると、証明の道を辿ったのでは、神を「導出されたもの、何か或るもののなかで根拠づけられたものとして表象する」仕儀に陥らざるを得ない。つまり、「概念把握すること **Begreifen** は神の依存性 **Abhängigkeit** を示すことである」（Bd.20 S.318）。概念把握は「媒介知」であり、それは「認識」と同義である。だから、「認識するはたらきは専ら有限者にしか係わり得ない」（ebd.）。この点に於いてヤコービの哲学は「全体として我々は現象しか認識し得ないというカントの結論と同じだ」と評価されることになる。認識がヘーゲルの捉えた問題の焦点になる。ヤコービは、認識について「我々は、或る事象を…近接

する原因から導出することができる場合に、当の事象を概念把握する」<sup>5</sup>と言う。これを次のように説明することができる。

「我々が或る事象を認識するのは、その直接的な諸条件を系列に従って洞察する場合である。…この洞察は明瞭でなくてはならない。ところで、それが認識すること一般であって、或る特定のものの **etwas Bestimmtes** についてその諸条件を認識すること、或る特定のものを条件づけられたもの、他者によって産出されたもの、或る原因によって産み出されたものとして洞察することである。」<sup>6</sup>（ebd.）

ここで我々は「条件」というカテゴリーに出逢うのだが、ここでは差し当たり、「近接する原因」と同じように使われており、「原因」とも区別されていない。ヘーゲルはヤコービの表現に即して論点を提示していく。——「このことと無条件的なものを認識しようという企てについてのヤコービの見解は連関している」（ebd.）とヘーゲルは指摘する。この論点は重要である。なるほど、「認識のはたらき」に限定して言えば、或る事象についてそれに先立つ諸条件を発見することしか問題にならない筈だから、無条件的なものは出てくる余地がないように思われる。しかし、ヤコービは「条件づけられたものの表象と無条件的なものの表象は人間の内にあり、両者は互いに引き離しがたく…結びついている」（ebd.）と考えた。しかも、「条件づけられたものの表象は無条件的なものの表象を前提し、前者の表象は後者の表象を介してのみ与えられ得る」（ebd.）と言う。無条件的なものの表象は人間の頭に浮かぶ。しかし、それは認識ではないのだ。

「無条件的なものを認識するというのは、無条件的な条件を発見しようとする、つまり、無条件的なものに条件を与えようとする、理解し得ないもの **das Unbegreifliche** に向かって我々に理解し得るもの **ein uns begreifliches** を作り上げようとするのである。…我々が理解する

begreifen 限りは、我々は条件づけられた諸条件からなる一連鎖をもつ。この連鎖が止むところで我々の理解も止み、…そこに至れば我々はもはや認識することはできない。」(ebd.)

認識は無条件的なものに係わろうとすると悖理に陥る。即ち、「無条件的なものが理解されとすれば、それは無条件であることを止める。なぜなら、それは諸条件を受け取らざるを得ないからだ」(ebd.)。そこからヤコービは、「無条件的なもの」は「条件を持たないから、概念把握され得ず」、「直接的にしか受け取ることはできない」ということを引き出す。それは、「事実」として受け取る他なく、「それはある es ist」としか言えないものである。それどころか、「条件づけられたもの」の連関の外部にあるものを認識することが概念によって要求されることはあり得ない」(ebd.) ことにもなる<sup>7</sup>。——以上のヤコービの思想をヘーゲルはどう捉えるか。

ヤコービは「無条件的なもの」という概念にキリスト教的な神の表象を結びつけているであろうから、人間にあっては有限者の表象は神の表象なしにはあり得ない、という信仰を表明しているだけかもしれない。しかし、論理的に見れば、ここで看取されているのは、二つの観念の不可分性でしかない。即ち、「無条件的なものの観念」と「条件づけられたものの観念」は、「右」と「左」のような観念と同じで相関的であり、互いに相手を欠いたのでは没概念である、という相関関係しか見られていない。しかも、これは形式的には、「無条件的なもの」も「条件づけられたもの」を前提しなくては没概念だということでもある筈だ。これは、「無条件的なもの」を認識するための具体的論理が欠落しているということである。この欠落のゆえに、神について「存在」より他に何も認識しない「直接知」の立場に留まることになる。——「無条件的なもの」の認識を引き受けたとき、「無条件的なもの」を単なる存在より以上の内容に於いて把握する論理が要求されたのである<sup>8</sup>。

## 1-2 根拠と条件：二つの体系内での位置づけの

### 問題

「条件」をヤコービとは違った論理で把握することが求められる。だが、この要求に直ちに答えるわけにはいかない。ヘーゲルの「条件」に対する扱いがすでに問題含みだからである。

外形的に見て、所謂『大論理学 Wissenschaft der Logik』体系と『エンツュクロペディー Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse』体系内の所謂『小論理学』に於ける「条件」の扱いは著しく異なり、全体に占める位置すら動揺している。『大論理学』では、「条件」は二回論じられており、一度目は「本質論」の「第1篇 それ自身に於ける反省としての本質」の「第2章 本質態あるいは反省諸規定」に続く「第3章 根拠」の最後の項目として登場し、二度目は第3篇「現実性」の「第2章 現実性」のなかで「実在的可能性」の一モメントとして再び登場する<sup>9</sup>。『小論理学』では、一度しか登場せず、『大論理学』の二度目の箇所と同じで、扱い方もほぼそのまま保持されている。要するに、『小論理学』では「根拠」との関連で「条件」は扱われていないのである<sup>10</sup>。本稿の2で扱うのは、『小論理学』では省略された箇所、即ち、『大論理学』の体系の一回目に登場する「条件」だけである。しかし、これはヘーゲルによって放棄された構想ではないのか。

二つの体系のあいだには厄介な問題がある。『大論理学』は「存在論」の再版が1832年に出版され、この領域に関する限り、ヘーゲルの最後の考えが盛られていると考えていい。しかし、「条件」の登場する「本質論」の場合、事情は些か複雑である。——『大論理学』の「本質論」は1813年に出ているが、『エンツュクロペディー』の初版(所謂『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』)が1817年に出版されており、それ以後出版された『エンツュクロペディー』の第2版(1827年)も第3版(1830年)も「条件」に関する位置は変わらない<sup>11</sup>。要するに、『大論理学』よりも『小論理学』の方が後に出された体系構想なのである。発行年から見れば、『小論理学』にヘーゲルの最終的見解が含まれていると考えるのが自然

のように思える。しかし、事情はそれほど単純ではない。——『大論理学』は何と言っても公衆 **Publikum** に向けた著作であるのに対し、『エンツクロペディー』は学生向けの講義のハンドブックを提供する目的で書かれたものである。もちろん、基本的な哲学的見解については変わるはずもないが、私としては「公衆に向けた」ということを重く受けとめ、『エンツクロペディー』に於いて分かり易さのために犠牲にされた議論が『大論理学』では保持されていると考えたい<sup>12</sup>。

二つの体系構想の違いは「根拠」の位置づけに現れている。『大論理学』では「本質論」の「第1篇 それ自身に於ける反省としての本質」が三つの章に分かれており、「第1章 仮象」、「第2章

本質態あるいは反省諸規定」に続く章として「第3章 根拠」が置かれ、これがさらに区分されて「A. 絶対的根拠」、「B. 規定された根拠」、「C. 条件」となっている。これに対して、『小論理学』では「本質論」が三つに区分され、その初めのAが「現実存在の根拠としての本質」であり、これがさらに三つに区分され、初めに「a. 純粋な反省諸規定」が来る。これがさらに細分されて、「 $\alpha$  同一性、 $\beta$  区別、 $\gamma$  根拠」となっているが、「条件」の記述はない。『大論理学』では根拠は「反省規定」から外れており、『小論理学』では「反省規定」の一つとされている<sup>13</sup>。これは何を意味するのだろうか。

## 2. 「完全な根拠」の不完全性と「条件」の論理構造

『大論理学』の「根拠」の目次をみると、全体が「A. 絶対的根拠」、「B. 規定された根拠」、「C. 条件」の三つに区分されている。本稿が直接の考察対象にするのは「C. 条件」であるが、ここに至る道筋を追っておかなくては、このカテゴリーに必然的なものとして要求される論理構造が見えてこない懼れがある。一見迂遠と思われるかもしれないが、その前の「B. 規定された根拠」（これはさらに、a. 形式的根拠、b 実在的根拠、c. 完全な根拠、に区分される）、特に通常の意味での根拠の完成態と見なされる「完全な根拠」

の成立<sup>14</sup>の論理を見ることから始めよう。

### 2-1 「完全な根拠」から「条件」へ

#### 2-1-1 「完全な根拠」の構造と欠陥

前もって「根拠関係」と「根拠」の関係について確認しておこう。根拠は根拠づけられたものとの関係（根拠関係）に於いてのみ根拠である。この関係は、同一だけでも、区別だけでも成り立たない。根拠と根拠づけられたものが全くの同一であれば、一方が他方を根拠づけるという関係は成り立たないし、また両者が全く異なったものであれば、両者は関係づけることすらできない。従って、根拠と根拠づけられたものとのあいだには、或る意味での区別と、或る意味での同一性が同時にあるということにならざるを得ない。『小論理学』で「根拠とは同一性と区別との統一である」（Enz § 121）と簡潔に表現されているのはこの事態を現している。

「完全な **vollständig** 根拠」も上記と同じ関係に於いて成り立つ「根拠」である。「完全な根拠」に於いて直ちに問題になるのが「完全な根拠関係」（Bd.6 S.110）である。その関係は「形式的根拠と実在的根拠を同時に自分のなかに含み、実在的根拠に於いて互いに対峙していた直接的な内容諸規定を媒介するもの」（ebd.）と説明される。「形式的根拠」は同一性のモメントを現し、「実在的根拠」は区別のモメントを現す。——二つのモメントは「完全な根拠」に至る前までは、抽象化され自立的に捉えられていた。「形式的根拠」に於いては、内容が捨象され、「根拠づける」という思考の形が一つ自立態として取り上げられ、「実在的根拠」に於いては、「根拠づける」関係に入る前にある内容だけが根拠関係という形式から離れて自存するものとして取り上げられていた。——これらのモメントを同時に含むのが「完全な根拠関係」である。引用の後半部はその含み方を説明している。「実在的根拠」に於いて自立的・直接的に存在すると見なされていた内容が媒介されることによって「形式的根拠」との一体性が獲得される、というのである。この説明はまだ形式的でしかない。ヘーゲルの叙述を追うことにしよ

う。

ヘーゲルは「完全な根拠関係」を説明するに際して、二つの或るもの *Etwas* の関係を持ち込む。——説明の便宜上、二つの或るものを X と Y とし、それぞれがもつ内容規定を A と B とする。——X は二つの内容規定を没交渉的なものとしてもっているため、そこでは両規定のあいだに根拠関係は成り立たない。そこには「揚棄された関係」(Bd.6 S.110) しかないのだから、一方の内容規定 A を根拠たらしめるのは「他の関係」(ebd.) にならざるを得ない。この関係をもつのがもう一つの或るもの Y である。そして、Y がこのような関係をもつことができるのは、Y が「二つの内容規定の直接的な結びつき」(ebd.) を含んでいるからである。即ち、X に於いて没交渉的である二つの内容規定 A と B が根拠関係を形づくるのは、Y に於いて A と B が根源的に結びついている」(Bd.6 S.111) からだ。その意味で、「或るもの〔X〕に於いて二つの内容規定がとる根拠関係は、或るもの〔Y〕の原初的自体的に存在する関係によって媒介されている」(ebd.) と言うことができる。

こうして、内容規定 A と内容規定 B のあいだの根拠関係は、二つの或るもの X と Y の関係という回り道を通して措定されることになる。ヘーゲルは、「…或るもの〔X〕に於いては、単にこの第二の規定〔B〕が媒介されているばかりではなくて、‘この或るもの〔X〕の直接的な規定〔A〕が根拠だ’ということもまた媒介されている」(ebd.) と言っている。要するに、上述した二つの或るものを巻き込んだ関係こそが「根拠 A の根拠」(Bd.6 S.112) だというのである<sup>15</sup>。——しかし、これは説明になっているだろうか。或るもの X の中に没交渉の二つの規定 A と規定 B があり、これらの規定が根拠関係を結んでいることが、他の或るもの Y の中の規定 A と規定 B のすでに承認されている根拠関係に基づいて導かれているに過ぎないのではないか。なるほど、このような推理は、或るもの Y に於ける規定 A と規定 B の根拠関係が承認されていれば、問題はないかもしれない。しかし、或るもの Y に於ける規定 A と規定 B の根

拠関係はどのようにして知られたのか。これを知るには、さらに他の或るもの (Z?) に頼らなくてはなるまい。しかも、その或るもの Z がもつ規定 A と規定 B の関係もさらに他の或るものによって根拠づけられなくてはならないはずである。——これでは、何処か或るものに於いて根拠関係を示す根源的關係(?) を見出して打ち止めにすることができなければ、無限溯行に陥る他ない。問題は振り出しに戻ったように見える。結局は「根拠関係」が成立するための根拠を求めているのだから、二つの或るものの関係を持ち出したところで、「根拠」の孕む宿命的な構造を免れてはいないからである。ヘーゲルが「条件」を主題化する背景はここにある。「条件」が視界に入ってくる道筋を追うことにしよう。

## 2-1-2 「完全な根拠」の欠陥の除去と「条件」の不可避性

二つの或るものの関係の導入は全くの無駄だったのか。そうではない。二つの或るものを持ち出したのは、内容規定 A と内容規定 B の「関係の仕方」に二種の違いがあることを明確に示すためだったと考えられる。「実在の根拠関係」と「形式的根拠関係」を同時に含む「完全な根拠」は、二つの或るものの関係によって具体化されたのであるが、それは二つの或るものが、二つの内容規定の「関係の仕方」を体現していたからである。二つの或るものを「完全な根拠関係」に置くのは、二つの内容規定が或るもののそれぞれに於いて占める「関係の仕方」の違いによるのである。だから、問題を解く鍵は、内容規定 A と内容規定 B の二種の「関係の仕方」の関係に求められねばならない。問題は、如何にして「根源的な結合関係」と「没交渉的な並存」とは区別されながらも不可分であるのかである。「統体の形をとった根拠関係」がこれを解く糸口を与える。

「…統体の形をとった根拠関係は本質的に前提を立てる反省 *vorsetzende Reflexion* である。形式的根拠は直接的な内容規定を前提し、実在の根拠としての直接的な内容規定は形式を前提する。



かくして、根拠は直接的な結合としての形式である。しかし、そうであるから、形式は自分を自分自身から突き離し直接態をむしろ前提し、そこに於いて他者としての自分に関係するのである。この直接的なもの〔他者〕が内容規定、単純な根拠である。しかしながら、根拠は、このようなものとして、即ち、根拠として自分から突き離されてもいるが、同様にまた他者としての自分に関係する。」(Bd.6 S.112)

やや長いが説明を試みよう。——「統体の形をとった根拠関係」は「完全な根拠関係」の制約を超えたものとして要請されて登場する。これをヘーゲルは「前提を立てる反省」と規定する。この根拠関係の二つのモメントが「前提を立てるはたらし」に於いて捉えられるのである。二つのモメントとは「形式的根拠」と「実在的根拠」であるが、これらそれぞれが互いを前提し合う関係にある。つまり、「形式的根拠」がそれとして成り立つためには「実在的根拠」が先立つものとして前提されていなくてはならず、またその逆、「実在的根拠」がそれとして成り立つためには「形式的根拠」が先立つものとして前提されていなくてはならないということである。これを二つの内容規定の「関係の仕方」の問題としてみれば、「根源的な結合関係」と「没交渉的な並存」とが一方だけが独立して存立することではなく、両者は不可分だということだ。つまり、二つの内容規定〔AとB〕の「根源的な結合」は、その直接的在り方との不可分性を具えたものとして、「直接的・没交渉的な並存」を前提することになり、逆に、「直接的・没交渉的な並存」は「根源的な結合関係」を前提することになる。二つの或るものの関係としてみれば、或るものYが或るものXと根拠関係を形づくっている場合、両者が互いに前提し合う、ということだ。しかし、「互いに前提し合う」というのでは、何の解決にもなっていないのではないか。或る意味ではその通りである。

「根拠関係」という根源的な結合の中でのみ規定Aは規定Bを根拠づける「根拠」となるのであるが、この根源的な結合をそれだけで切り離したので

は没概念である。この根源的な関係はそれに先立つものとして「両規定の没交渉的な直接的在り方」を前提している。これは些か微妙な表現である。根拠関係から「突き離された直接的在り方」は、根拠関係とは没交渉的に自立しているように思われるかもしれないが、「突き離す」運動の結果として捉えれば、それは、或る意味で「根拠関係」によって措定されたものでもある筈なのである。この意味で、「先立つものとして前提されている」という表現には二重の意味が含まれている。このような直接的在り方は、「根拠」が根拠として成り立つ事態の真相を究明する中で要求されて出て来たものである。これが「条件」というカテゴリが導入される理路である。「根拠関係」にとって前提されるものが「条件づける媒介 bedingende Vermittlung」(ebd.)として視界に入ってきたのである。

## 2-2 「条件」の論理的構造

### 2-2-1 「条件」の三つの規定

ヘーゲルは「条件」を先ず次の三点に於いて規定する。箇条書きにして引用しよう。

①条件は直接的な多様な定在である。

②この定在は或る他者、根拠であるところの或るものに関係づけられている、但し、その或るものはこの定在の根拠ではなくて、他の観点に於ける根拠である。というのは、定在そのものは直接的であり、根拠を欠いているからだ。この関係によって定在は措定されたものである。即ち、直接的な定在はそれだけで切り離して für sich 条件として存在するのではなく、他者に対する条件として存在するものということになる。だが同時に、「定在がそのように他者に対して存在する」ということそれ自身が一つの措定された存在である。即ち、「定在が措定されたものである」ということはその直接態に於いて揚棄されているのであって、定在は「条件である」ということに対して没交渉なのである。

③条件は、根拠の前提をなしているという意味で、直接的なものである。条件は、この規定に於

いて、自己同一性へと還帰した根拠の形式関係、従って根拠の内容である。(以上Bd.6 S.113)

議論を構成する要素は、条件が根拠に対して没交渉な「直接的なもの」であると同時に「或る他者との関係に於いて指定されたもの」である、ということである。①から③までは切り離して捉えることは許されない<sup>16</sup>。①は「根拠関係」から切り離された存在者の世界を指しているように見えるが、②によって直ちに他者との関係にはいる。条件は、「根拠関係」の内部に全的に入り込むことはないにしても、全くの外部として存在するのではなく、「条件である」ためには何らかの係わりを「根拠関係」に対してもつのである。しかし、この他者への関係はもう一つの側面をもっている。「‘定在がそのように他者に対して存在する’」ということそれ自身が一つの指定された存在である」ということは、謂わば、外部の観点か何かによって他者と関係づけられているのであって、それ自体は単独で何ものかであり得るということである。即ち、条件は条件である限りで、「根拠」と何らかの関係をもつ、と同時に、「根拠関係」から切り離されて自立した内容をもつのである。③はこれを「前提」という論理で纏め上げる。「根拠の形式的関係」に先立つものとして前提されたものが条件とされているのである。ここにも「没交渉的直接性」と「被指定性」からなる二重性を看取しなくてはならない。——卑俗な喩えて説明しておこう。或る職人が家を設計して立てる場合、当の職人の精神的・肉体的能力が根拠になって家を建てれば、家とその職人の諸能力のあいだに「根拠関係」が成り立つと考えていいだろう。この場合に、「条件」は家の材料や土地の性状などに相当する。これらの諸条件は、家と職人との関係から切り離されて、それ自体で独立して他の条件にもなり得るような内容規定をもっているだろう。しかし同時に、それは「条件である」限り、家が造られるために限定されるはずである。

## 2-2-2 「相対的に無条件的なもの」の孕む宿命的悖理

条件は、条件づけられたものとの相関に於いて、「無条件的なもの」と呼ばれる。この意味での無条件的なものは「相対的に無条件的なもの」と呼ばれるが、或る種の有限性を宿命的に抱え込むことになる。この道筋を追うことによる。

条件は先ず、「根拠に対する条件づけられていない直接性というモメントである」から、この条件には「根拠関係が対峙して *gegen* いる」のであり、「或るものは条件の外部でも根拠をもつ」ことになるのである。このとき、根拠は、定在に係わることなく、根拠関係を形づくっている。その意味でそれは「反省の空虚な運動」であり、条件から乖離した「自立した媒介運動」(以上Bd.6 S.114)である。ここに於いては、条件と根拠(ないし根拠関係)は相互外在的に対峙しており、自立的にそれぞれが固有の内容をもって存在している。ところが、条件の内容は「同時にまた根拠の即自存在をなしてもいる」(Bd.6 S.115)と言われる。従って、条件は「自立的な内容」と「根拠関係のモメントとして生成する筈の *sollen* 内容」との「混合」(*ebd.*)ということになる。

根拠と条件が今やこの事情全体を構成する二つのモメントである。これら二つは「一方では互いに対して没交渉的で条件づけられていない二側面」(*ebd.*)となり、この場合「根拠」も「条件」もそれぞれが「無条件的なもの」である。他方でそれらは「媒介された二側面」(*ebd.*)であって、この場合、根拠も条件も「条件づけられたもの」でしかない。二つの在り方は「一つの関係の内にある矛盾」(*ebd.*)である。だが、この矛盾は直ちに没論理というわけではない。両側面は相互に前提し合う関係にある、即ち、互いに相手を欠いたのでは存立しない。従って、根拠と条件は「無条件的なもの」であるために、互いに制約され・条件づけられた関係でもなくてはならないことになる。謂わば「条件づけられた無条件者」といった悖理が出来上がってしまう。

「条件は…相対的に無条件的なものでしかない。それゆえ、このような条件それ自身は条件づけられたものと見なされ、新たな条件が問われるのが

常なのであるが、これによって、条件から条件へと連なる何の変哲もない無限累進が導入されることになる。」(Bd.6 S.118)

以上の考察は「根拠」の孕む欠陥を浮き彫りにした。そして、これは本稿の1で見た、ヤコービが「認識」に向けた批判の基礎をなす論理そのものである。「絶対的な無条件的なもの」のもつ論理的構造は、ヤコービの批判を根底から破壊するものでなくてはならない。

## 2-3 「絶対的な無条件的なもの」の論理

### 2-3-1 「条件」と「根拠」の相対的関係の本質

「相対的に無条件的なもの」が宿命的に抱え込んでいる矛盾をどう克服するか。この課題の解決のために「絶対的な無条件的なもの」の論理が求められる。それは、「相対的に無条件的なもの」を外観から解消することでは済まない。そのようなことをすれば、それは「相対的に無条件的なもの」との関係に於いて規定される「相対的な何か」にしなければならないからだ。このアポリアを切り抜けるためにはどうすればいいのか。

「二つの相対的に無条件的なもの〔根拠と条件〕は、差し当たり、それぞれが他者の内へと現れるscheinen。——直接的なものとしての条件は根拠の形式関係の内へと、根拠の形式関係は根拠の措定された存在としての直接的な定在の内へと現れる。だが、それぞれは自分の他者のこういった現れの外部で自分に基づいて自立的であり、自分固有の内容をもっている。」(Bd.6 S.115f.)

ヘーゲルは、根拠と条件のそれぞれにではなく、両者の関係そのものに照明を当てている。表面的には、根拠と条件のそれぞれが「相手の内へと現れる」のであるが、同時にまた、「この現れとは切り離されて自立的でもある」、ということが言われているに過ぎない。これは、これまで確認したことの繰り返しでしかないように見える。しかし、「反省論理」の術語が使われていることに注

意する必要がある。「前提のはたらき」と「措定のはたらき」に関するヘーゲル独自の論理<sup>17</sup>を駆使することへの先鞭をつけているのである。——ここでは、「他者の内へと現れる」ということが、それぞれ二つの側から述べられており、「自立的内容をもつ」ということも「それぞれに基づいて」語られているだけである。別言すれば、「根拠と条件は…二つの反省である限りに於いて、自分自身を揚棄された側面として措定し、この自分の否定と関係し、相互に相手を前提し合う。」(Bd.6 S.117)ということが言われているのである。しかし、ヘーゲルはこれを次のように説明し直す。

「だが、このことは同時に両者の一つの反省でしかない。それゆえ、両者の前提を立てるはたらきは一つの前提を立てるはたらきにすぎない。むしろ、両者の相互対立性は、‘両者が自身の一つの同一性を自らの存立するはたらきと自らの根底として前提する’ということへと移行するのである。(Bd.6 S.118)

根拠と条件という二つの事柄の内に「一つの反省」、「一つの前提を立てるはたらき」を見出し、両者の「同一性」を求めることへと向かう。この「同一性」は根拠と条件に対する第三者ではない。「相互対立性」がもたらす相対化からこの「同一性」は免れる。ヘーゲルの説明は些か分かりにくい。項を改めてこの「同一性」の解明をしよう。

### 2-3-2 「絶対的に無条件的なもの」の構造の必然性

「絶対的に無条件的なもの」は、前項で見たように、根拠と条件の「同一性」として捉えられる。それは、根拠と条件に纏わりついていた「相対性」を免れ、「無限累進」のアポリアに陥らない構造をもっていなくてはならない。——「或る条件のもとで新たな条件が問われるのはなぜか。即ち、或る条件が条件づけられたものと見なされるのはなぜか」(Bd.6 S.118)とヘーゲルは問い、これに対して今この文脈に即して、「条件そのものが条件づけられたものであるのは、その条件が措



定された即自存在だからである」(ebd.)と答える。そしてこのとき、「条件は絶対的に無条件的なものの中で揚棄されている」(ebd.)と付け加えるのである。この答えは、如何にして「条件から条件へと連なる無限累進」に落ち込むことを回避しているのだろうか。「措定された即自存在」と「条件が揚棄されている」というところに謎を解く鍵がありそうである。字面を見ただけでは、前者は形容矛盾のようであるし、後者では「条件」が一体どうなってしまったのかが分からない。また、根拠との関係がここで触れられていないことも不可思議である。

「絶対的に無条件的なもの」は「条件と根拠を自分のモメントとして自分の内に含んでいる」(Bd.6 S.118)とヘーゲルは言う。「揚棄された」というのは、「絶対的に無条件」なものを構成するモメントとして捉え直されたことを言っていたのである。モメントは、それだけを切り離したのでは何ものでもなくなる。「絶対的に無条件的なもの」の内でのみ根拠も条件も成り立つのである。この意味で条件と根拠は不可分である。条件と根拠は「両者一つになって beide zusammen 絶対的に無条件的なものの形式ないし措定された存在を形づくっている」(ebd.)。「一つになる」ということは、「絶対的に無条件的なもの」という全体がすべてであって、これから乖離した自立的ものは一切ない、という意味である。これは、或る意味で、「無条件的な事象は両者の条件である」(ebd.)ということの意味する。しかし、これは相対的な条件と同じ論理で捉えてはならない。ヘーゲルはこれを「それ自身が根拠であるような条件」(ebd.)と表現する。この表現から見て取れるのは、「絶対的に無条件的なもの」は「根拠」と「条件」に対して第三の存在者として立つものではなく、両者のあいだにあるしかるべき事態を指す、ということである。——ヘーゲルは以上を次のように総括する。

「これら二つの側面〔根拠と条件〕は統体〔絶対的に無条件的なもの〕を前提するのであるが、それは、この統体が両側面を措定するものである、

というようにしてである。逆に言うと、両側面が統体を前提するがゆえに、統体もまたもや両側面によって条件づけられているように現れ、事象はその条件から、またその根拠から発出する entspringen ように現れる。だが、これら二つの側面が自らを同一的なものとして示したことによって、条件と根拠の相関は消失してしまっている。即ち、両者は、一つの現れ〔仮象 ein Schein〕へと格下げさ〔下位に措定さ herabsetzen〕れているのである。絶対的に無条件的なものは、その措定した前提するはたらきに於いては、この現れが揚棄される運動に他ならない。」(Bd.6 S.118f.)

「根拠と条件」に対する「絶対的に無条件的なもの」の係わりが、「前提するはたらき」、「措定するはたらき」、「仮象」といった「反省論理」の術語を駆使して説明される。前提を立てるものは、立てられた前提を自分に先立つ直接態として立てる。このとき、当の前提を立てるものは、この直接的前提によって措定されたものに格下げされる。ここで前提を立てるものとは「根拠と条件」であり、これらによって前提される直接的なものは「絶対的に無条件的なもの」(ここでは「事象」と呼ばれている)である。——ヘーゲルは、「絶対的事象」が「根拠と条件」に基づいたものとして現れる局面に触れている。これは謂わば「認識論的秩序を表しており、我々に直に現れる現象から根源へと溯っていく道である。「絶対的に無条件的なもの」に於いては、このような秩序は揚棄されている。そこでは、条件と根拠は自らを揚棄する運動に巻き込まれ、それらの揚棄された形である「同一的なもの」になってしまっているからだ。ヘーゲルの「絶対的に無条件的なもの」の論理は、条件と根拠をモメント＝仮象として含むような動的構造としてしか表現されない。この構造を構成するモメントをこの構造から切り離してしまえば、本稿でその一端を見てきたように、様々なアポリアに陥る。引用の最後はこの動的構造を明示している。「絶対的に無条件的なもの」は、「根拠と条件」を現しめ且つ揚棄する運動に於い

てしか姿を現さないのである。

### 3. 考察——「条件」の論理の哲学的意味

本節では、これまでの考察を踏まえて、「条件と根拠」を通じて導かれた「絶対的なもの」の論理のもつ哲学的意味を考えてみたい。

ヤコービの問題から見ていこう。事柄をその条件に於いて規定することが認識だとすれば、認識は「真に無条件的なもの」に係わることはできない。認識したと同時にそれは「条件づけられたもの」に転じてしまうからだ。この論法のどこにヘーゲルは問題を見ているのだろうか。——ヘーゲルはカテゴリーを即かつ向自的に考察すべきだとしているが、「条件」の場合もこれが当てはまる<sup>18</sup>。「本質論」に固有の考察方法を言えば、或るカテゴリーを他のカテゴリーとの連関（これには多様な種類がある）のなかに置き、その規定のされ方を調べ上げた上で、そのカテゴリーの限界を指示し、このカテゴリーをモメントとするメタ・レヴェルのカテゴリーを導出する。——ヤコービは「条件」を日常的に理解されているがまさに無批判に与えられたものとして捉え、それが他のカテゴリーと如何なる連関の内にあるかすら考えずに、適用している。「認識」が、このように受け入れられた「条件」によってしか理解されていないからこそ、貧しい帰結にしか至らないのだ。ヘーゲルにとって認識とは、「条件」そのものの限界と価値を考察することも含んでいたし、むしろそこにこそ本領があった。簡潔に振り返っておこう。

「根拠」が成り立つための論理的要件を調べ上げていくと、「形式的根拠」と「実在的根拠」を同時に具備した在り方が求められ、「二つの或るもの」の関係へと視界を広げていった。ここから、「根拠関係」にはその外部の定在が要請され、これが「条件」の論理に繋がる。そして、「条件」と「根拠」の関係が「没交渉性」と「被措定性」の統一と区別の問題として析出されていく。こうして最後に「絶対的に無条件的なもの」の論理に到達したのである。ここで、本稿の2の最後に引用した文について補足しておく。

認識の秩序について先に触れたが、我々にとっ

て先なるものとしての「条件と根拠」から我々にとって後なるものである「絶対的に無条件的なもの」へと進むことになるから、前者が「認識根拠」となる。他方で、存在の順序から言えば、事柄にとって先なるものが「絶対的に無条件的なもの」でこれが「存在根拠」となり、事柄にとって後なるものが「根拠と条件」となる。——ヘーゲルは、このような形で成り立つ二つの秩序をそのままの形では認めない。これらは仮象 *Schein* として捉えられているのである。だから、これらは「絶対的に無条件的なもの」の論理の中にモメントとして組み込まれている。この理解に大過ないとすれば、ヘーゲルを新プラトン主義的な意味で *Monist* と見るのは正しくないだろう。「根源的一者の発出と還帰」といったのでは、実体的に固定された一者の展開をイメージしてしまう。有限的多様が形をなし且つ揚棄されるというその運動（はたらき）に於いてしか「絶対的なもの」は語れない。「有限者の非存在は絶対者の存在である」（Bd.6 S.80）という言い方もこれに関連している。それは、ヘーゲルが「絶対性」をもつものについて語る際に決して放棄することのない構造である。（終わり）

#### 注

- 1 本稿で扱うヘーゲルのテキストは、『論理学』に関しては、G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Bänden (Suhrkamp Verlag 1969) の巻数を Bd.. 頁数をS.によって引用直後の（ ）内に記す。『エンツュクロペディー』（第三版）からの引用は節番号を§の後に記す。また、『哲学史講義』については、上記著作集の Band 20 からの引用の場合は巻数とページ数を（ ）内に記すが、新しい編集版を引用する場合はそのつど注でページ数を記す。新しい編集版とは、Hegel, Georg wilhelm Friedrich: Vorlesungen: ausgew. Nachschr. u Ms Meiner NE. Bd.9. Vorlesungen ueber die Geschichte der Philosophie Teil 4 Hrsg.von Piere Garnison und Walter Jaeschke. Felix Meiner Verlag GmbH, Hamburg 1986 のことである。これは緻密な文献学的考証に基づくもので、基本的に1825/26年の講義のために書かれたヘーゲルの手書き草稿を素材

にして編集されている。Suhrkamp Verlag の著作集その他で広く採用されている Michelet 編集とは異なる。Michelet のものはイェナ時代から10回(?)ほど行われたヘーゲルの講義録から、比較的纏まりのあるものを選び一つに繋ぎ合わせてできたものであるが、使われた講義ノート・講義録などの素材は現在ではほとんど失われている。なお、新しく編集されたテキストは、編者も言っているように、Michelet 版に代わるものを意図してはいない。文献実証的観点からは、新編集版が信頼できるのであるが、Michelet 版と比較して基礎となる資料が著しく乏しいのである。それゆえ、本稿では双方共に使用している。——なお、引用中の強調部分(傍点)は、原則として引用者によるものである。

2 Enz. § 61-78

3 注1の新編集版 S.148を参照。引用した一文はこの版にもあるが、挿入箇所は異なる。この講義ノートでは、項のタイトルとして「4. カント、フィヒテ、シェリング」となっており、この項のはじめの一文が引用した文なのである。つまり、この項全体の見通しを述べる際に言及されたものである。この講義ノートでは、カント、フィヒテと講義が進んでいった後で(歴史上はヤコービの生没年はカントとフィヒテのそのあいだにあるのであるが)、フリードリヒ・ハイネリッヒ・ヤコービの名が見出しのようにして挟まれ、シェリングに移る前にかんりの分量がヤコービの検討に割かれている。内容上は、順序から想像されるように、Michelet 版と違って、カント哲学との異同が中心に述べられ、カント哲学の帰結から出て来た哲学という位置づけが基調となっており、特にカントの実践哲学との関連を立ち入って考察している点が興味を惹かれる。(この論点は Michelet 版にはない。)

4 上記新編集版『哲学史講義』S.165

5 a.a.O. S.165f.

6 a.a.O. S.166

7 新編集版の講義ノートでは、これに続いてカントの「実践理性の要請としての神」を問題にし、「善なるものと世界との矛盾」をカントが解決できなかった理由として、「自由の原理の抽象性」が検討され、他のテキストには見られない論点が追求されている。

カント的理性をヘーゲルがどのように超えようとしていたかが、この論点によって見易くなっている。本稿では検討する紙幅がないので、別の機会を扱いたい。前掲講義録 S.167ff.

8 晩年のヘーゲルのヤコービ評価に於いて論点の中心をなしているのは、『エンツュクロペディー』の「予備概念」の「客観性に対する第三の態度」にも見られるように、「直接知」に対する批判である。しかし、これは「客観性」に対する見方を類型化し、これらに対置するものとして自身の立場へと導入することを意図した論述であって、ヤコービの評価それ自体を主題としたものではない。ヤコービを全体として評価することになると、「直接知」を要求するにいたった論理過程を問題にせざるを得ない。そして、その基礎をなすカテゴリーが「条件」なのである。なお、ここには、カテゴリーの存在性格に関する論点が含まれており、カントのカテゴリーを「主観性」の内に閉じこめて理解したことに対する批判が重要であるが、これは本稿の3で触れる論点と係わる。

9 Hartmann は『大論理学』の根拠論の中の「条件」にアリストテレスの「様相概念」への関連が暗示されていることを述べているが、これは精々暗示でしかない。実際に「様相概念」が展開されているのは、「現実性」に於ける「条件」論で、そこでは「必然性」の構成モメントとして「実在的可能性」として「条件」が登場する。しかし、こちらは、どちらかというと、カントの様相概念との関連の方が強い。Vgl. Hartmann, Klaus: HEGELS LOGIK. De Gruyter 1999. S.332f.

10 『小論理学』では「条件」は「現実性」の問題としてしか扱われていない。そのため、『小論理学』の「根拠」論は著しく貧しくなっている。(分量的にも2節しか与えられていない。)『小論理学』では「根拠」は「反省規定」の一つでしかない。つまり、存在との関連なしに、思考規定の一つとして「根拠関係」の構成モメントが扱われているのである。

11 ハイデルベルクで出版されたエンツュクロペディー(第1版)とベルリンで出版されたそれ(第2版と第3版)とでは、周知のように大きな違いがあるが、「条件」の体系上の位置に関しては変わっていない。

- 12 前節で引用した『哲学史講義』も学生向けに講述された内容であるから、「公衆に向けた」ものでないことは確かである。しかし、内容的にヘーゲルの哲学史は、哲学史上の学説を論理学で扱われるカテゴリーに於いて評価し位置づける、といった性格を持っているので、本稿の目的から見て不都合はない。
- 13 『大論理学』でも「根拠は反省諸規定の一つである」(Bd.6 S.89)と言われていることから、『小論理学』と扱いに実質的な違いはないと思われるかもしれないが、ヘーゲルはこれに続いて「但し最後の反省規定、というよりむしろ、揚棄された規定であるという規定でしかない」(ebd.)と付け加えている。寺澤恒信訳『ヘーゲル大論理学2』付論参照、以文社1983年。461頁以下
- 14 『小論理学』では、実質的に「完全な根拠」に相当する議論も不十分にしかなされていない。
- 15 筆者は、「リングが地上に落下する」=X、「月が地球の周りを公転する」=Y、「重さがあること」を規定A、「地球に引かれる性質」を規定B、という具体例に設定し、この事態の解明を試みたことがある。『鎌倉女子大学紀要』(第9号)2002年発行に所収。
- 16 ①を切り離すと「多様な定在」という規定が導出されていないという批判が起こる。Schmidt, Klaus J. G.W.F.Hegel: Wissenschaft der Logik-Die Lehre vom Wesen. Schöningh, 1997. S.115
- 17 拙稿「論理的なものの体系と外的なもの——ヘーゲル論理学に於ける「反省論理」の構造について——」を参照。『鎌倉女子大学紀要』(第13号)2006年に所収。
- 18 カントとヤコービの「条件」をめぐる議論は、或る意味で対蹠的である。しかし、ヘーゲルの立場から見れば、両者ともに揚棄されるべき共通の前提的了解の上に立つものでしかない。二人の先行者による「条件」の理解は、日常的理解と地続きになっており、常識の域——「健全なる悟性 der gesunde Verstand」——を原理的には脱していない。
1. 「無条件的なものを認識することはできない」とするヤコービの思想に基づいて、ヘーゲルが「条件」の概念に見出したアボリアを確認する。そして、『論理学』に於ける「条件」の位置がもつ意味を暫定的に解明する。
2. 「完全な根拠」の不完全性を洞察し、これを介して「条件」が登場する必然性を考察する。さらに、「条件」と「根拠」の相対的対立性を克服する論理的基底を求め、「絶対的に無条件的なもの」の論理構造を捉える。
3. 「条件」の孕むアボリアをヘーゲルがどのように解決しているかを跡づけていき、その解決のもつ哲学的含意を考察する。

(2008.10.23受稿)

## 要旨

本稿の目的は、ヘーゲル論理学に於ける「条件」の哲学的意味を解明することにある。その手順は以下の通りである。